

図書館だより

名寄市立大学
2010.10.25
増刊号



巻頭言

— 読書週間特別増刊号 —



児童学科 家村 昭矩

「ほん」の楽しみ

何かにつけ移り気な私が、若い頃から続く趣味と自認するものがある。

40数年前、大学に入ったものの勉学熱心でなかった私は、教科書代の支払いも気がすまなかった。まもなく先輩から、格安で手に入る方法を伝授された。古本屋である。勇んで飛び込んだ店内で、目当ての本を手に入れたのはいうまでもないが、そこで人生の楽しみまで得ることになった。店内は、かび臭く、新旧入り混じった本が重なり合い雑然としていた。しかし、私には、大都会東京の中で見つけた未知への誘いであり、宝探しのような所であった。アルバイト代を懐に時折出かけた神田は、今も懐かしい。

最初に手にした本は、くだんの教科書のほか、30円均一棚にあったカバーもとれ痛みも激しかった『きけわだつみのこえ』（東大協同組合出版部 1949年刊）。それは、学徒動員で戦場に駆り出された若者たちの残した、日記や手紙の数々を収録したものだ。終戦の翌年生まれの私は、当時の彼らと同世代となっていた。わが身に置き換え、戦争の理不尽さを思い、むさぼり読み、関連の本を集めだしたことを思い出す。感慨は深かった。

以来、少々こだわりの古書誌関係から、安価で稀少物と思えば広告の類まで（紙くず同然の代物と、我妻は言う）幅広いジャンルに関心がいく。そして、旅先で訪ねる古本屋で、時間を気にしながら古本の匂いに浸る“ほんの”ひと時が、楽しみとなっている。



写真提供：CHIIDS サークル



2010・第64回 読書週間

気がつけば、もう降りる駅。

10/27～11/9



先生方に夢中になった本についてコメントをいただきました。どの本も本学で所蔵していますので、是非ご一読を！

OPACで検索



「最近夢中になった本と私の読書法」

社会福祉学科 小林 宏

一昨年、岩崎学術出版社から『集中講義・精神分析 上 一精神分析とは何か フロイトの仕事一』が出版された。著者の藤山直樹氏は精神科医で、日本人としては数少ないフロイト派の分析家（国際精神分析学会認定精神分析家）の資格を持つ。さらに精神科医の仕事の後、自らオフィスを開き、実際に精神分析の仕事に当たっている。

本著は、上智大学での精神分析の集中講義を文書化し加筆したものであるが、口語体で書かれ読みやすい本として仕上がっている。改めて思ったことは、「優れた『入門書』は難解な『専門書』に勝る」ということだった。フロイトの現代的意義を再考させられた。

今年の5月に『集中講義・精神分析 下 一フロイト以後一』が刊行された。待ちに待った本だったので、上巻に引き続き夢中にさせられた。ご一読をお勧めしたい。

さて、私の読書法だが、同時に三種類の本を並行して読んでいる。第一は少し難しい本で、少し疲れていたり短時間では読みづらいもの。第二は少し疲れていても短時間でも読める種類の本、第三はその中間である。4月に本学に着任するまで電車とバスで通勤していた。電車が混んでいたたり、バスの短い乗車時間でも第二、第三の種類の本なら読める。運良く電車の座席に座れた時には、第一の種類の本がゆっくりと読める。難点は鞆が少々重たくなることだが、読書の魅力にはかなわないと思っている。



教養教育部 関 朋昭

「『やれやれ』気がつけば、もう降りる駅。」この牧歌的な情景には、二つの事象「本」と「汽車」が必要である。このようなライフスタイルが普通だった頃からみれば、今は読書をする時間を創出することは、新しく物事を創造することと同じくらい難しいことである。

ところで、僕に原稿を依頼した真のねらいは、単に「お薦めの本」の紹介だと思う。よって、このままでは意味を成さないの、好きな作家の手掛かりだけを記すことにする。冒頭の二重括弧である。僕が愛読する作家が良く使うフレーズである。この言葉が文中に登場すると、何とも言えない幸せな気分となるから不思議なものである。本当に時間を忘れさせてくれる作家である。

僕の性格でもあるのだが、本は個人で楽しむものであって、人に薦めたりすることは大変気恥ずかしい限りである。故に悶々とさせてしまったことを心よりお詫び申し上げる次第である。『やれやれ』。





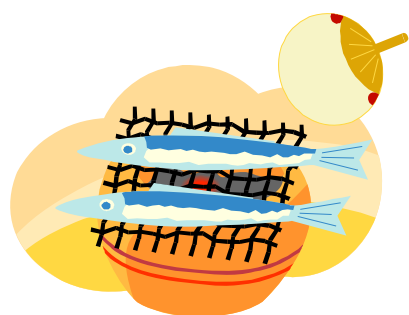
「私の読書活動について」

看護学科 山本里美

私が今繰り返して読んでいるのは、『「いいかげん」のすすめ』という本で、道新にコラムを書いている、ひろさちや先生の本です。この、ひろさちや先生は、印度哲学を専攻され、仏教などの著作を多数されている方です。

先生は生き方を宗教から学ぶことを、すすめてくれています。この本の中では宗教をもたなければ、人間らしく生きることができない、また宗教は人間らしい生き方を教わると述べています。それはつまり、宗教は自分の生き方の良い加減を知ることができ、良い加減で生きることが、人間らしく生きることと繋がることのようにです。つまり現代社会は物事に追われて過ごすことで、自分の良い加減を超えた状態で生きることが多く、自分を見失い、他人と比較する状況が多いため疲弊してしまい、人間らしさを失いやすいと示唆しているのではないかと思います。

何となく、このような状況に陥っていると感じる方は、時間もないかもしれませんが、たまには読んだことのない分野の本を開拓するのも、読書の秋が、チャンスかもしれません。



栄養学科 久保田のぞみ

読書の秋、食欲の秋、そして就活の秋。

マニュアル本はたくさんあるけど、どれもピントとこないという人に、三浦しをんのデビュー作『格闘する者に〇』(新潮文庫、2005年)と、石田衣良の『シューカツ!』(文藝春秋、

2008年)の就活小説を紹介します。

主人公には、①女子大生(可南子と千晴)、②マスコミ志望(漫画雑誌の編集者とテレビ局か出版社)という共通点があります。

違うのは就活のしかたと結末。ひとはSPIも知らないで就活をはじめの強者で、超マイペースだから面接官の受けがイマイチ。でも、やりたいことがはっきりしているので気持ちが揺るがない。もう1人は就活仲間と励まし合いながら計画的にサクサク進めます。最終面接で大失敗してへこみますが、そこから挽回して2社の内定を獲得します。

どちらがどちらの小説の主人公かは、読んでみてのお楽しみ。感情移入してもよし、「小説だからうまくいくんだよお」と冷静に読むもよし。きっと読みながら、自分はどうか、と自身の就活や職業観を再考するきっかけが得られると思います。



土曜日開館のお知らせ

11月20日 9:00~16:00



「何度も読み返した本『ゴールデンライラック』」

児童学科 糸田尚史

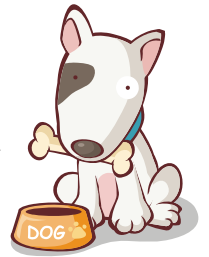
舞台は社会的養護や福祉施策が発展途上だった頃のイギリスである。両親のいないビリーは、親戚をたらい回しにされた拳句、最後は銀行家のスタンレー家に引き取られる。ビリーはそこで、友達から「居候で、みなしご」などと言われながらも、漸く教育を受ける権利も保障される。しかし、幸せも束の間、義父のスタンレー氏が脳血管障害で倒れ、銀行は倒産。社会保障制度の乏しい時代に十分なケアもないままスタンレー家は貧困と隣り合わせの社会階層へと転落する。若年労働者となったビリーは生活費を稼ぐべく過酷な地下鉄工事の重労働に従事するが、資本家の賃金不払いに抗議した結果、警察に捕まり留置場へ…。

フィクションではあるけれど、個人史と社会史が巧みに交差する社会心理学的な物語であり、これまでとこれからの社会福祉を考える上でも、優れたマンガ作品となっている。

「犬好きの方にお勧め『星守る犬』」

看護学科 小野 善昭

昨年秋頃に書店で、犬が向日葵の中で佇んでいる表紙の本が目に入り、犬好きである私の心を大きく揺さぶった。購入すると大変悲しい物語に家族一同で涙した。何度も読み直していくうちに、厳しい状況の中で漂々と生きる主人公と飼い主に忠実な犬のふれあいに心を打たれた。私も犬を2匹飼っているが、大切に関わっていただろうか。最近大きなペットブームが去り、売れない犬達が捨てられているニュースを目にするがその子達を私一人が救うことはできない。せめて今ある2つの命を大切にしていこうと感じた。また、人間は様々な苦境の中で生活している。自分だけではない他の誰かも苦境に立たされていること、その中でもその人らしい生活をしていることを再確認することは「看護」をしていく上で大切である。名寄が映画化の舞台となったこの物語を是非一読頂きたいと思う。



ブツクフェア



● 手づくり絵本展

短期大学部児童学科2年のコミュニケーション英語Ⅰの授業で取り組んでいる、英語の手づくり絵本を展示中です。力作ぞろい！！

今年の作品のほか、今まで授業で取り組んできた卒業生の作品も一挙公開。10月29日（金）まで、図書館本館で開催中です。まだ見てない方、お急ぎください！！

<<<休館のお知らせ>>>

11月18日（木）推薦・社会人入学試験のため休館いたします。

—— 編集後記 ——

めっきり寒くなり、講義を終えての帰り道も真っ暗ですね。無灯火の自転車は危険です!! もちろん歩きの人もご注意ください。秋の夜長、ゆっくり読書を楽しむにはちょうどいい季節です。日々時間に追われている人も読書でリフレッシュしましょ！

2010年10月25日発行 増刊号
名寄市立大学図書館運営委員会
〒096-8641

名寄市西4条北8丁目1
名寄市立大学図書館

